キャンパスアジア 北京大学留学報告(前半)

文学部人文学科現代文芸論専修課程 3 年　野中崇遥

キャンパスアジアプログラムにて、2019 年 8 月末より北京大学元培学院に留学しております。前半 1 学期（2019 年 9 月頭～2020 年 1 月頭）が終了しましたので、報告をいたします。

○寮生活について

北京大学東南門から目の前の歩道橋をわたって徒歩 3－4 分のところにある、中関新園の 5 号楼に滞在。2 人 1 部屋。フロア内に共用のトイレ・シャワールーム・洗濯機と乾燥機・簡単なキッチンルームあり。清掃は頻繁に行われ、とても清潔。冷暖房完備。ルームメイトは同じキャンパスアジアの日本人。私の隣人にタイ人、部屋を一つ挟んで北朝鮮人 3 部屋 6 人。同じフロアに友達になった韓国人・ベナン人。寮の様子は各自調べよ。ここで改めて詳述しない。

○食事について

食堂・コンビニとも数は多い。食堂で食べれば 1 食 10－15 元で済むが、食堂は営業時間が限られており常に異常に混んでいる。とある食堂で 12 月にウイルスによる食中毒事件が発生したが、衛生環境は悪く、汚い。味は期待しな方がいい。詳しくは過去留学者の報告を参照。

○授業について

私は以下の 4 つの授業を受講しました。いずれも中国語言文学系（いわゆる中文系）の授業で、使用言語は中国語です。私の専攻は文学なので、本学期はおもに文学の授業を中心に受講しました。

①「中国当代文学作品（上)」

開講学部：中国語言文学系、担当教員：蒋朗朗、開講時限：月曜 18：40～20：30（2 単位)、人数：最大 60 名

この授業は、中国当代、すなわち 1945 年 10 月 1 日の新中国成立以後の中国のさまざまな文学作品を読み、その内容を解説していくものでした。授業のはじめに新中国成立期の中国文学界の様相について講義が行われ、以後、毎回指定された作品について授業内で解説が行われました。小説のみならず、散文と詩歌も扱われました。一つ一つの作品について、作者の紹介、作品の内容、表現の特徴、文学史的位置づけなどが解説されていきましたが、授業名が「中国当代文学作品」となっているように、きちんとそれぞれの作品を読んで自分な

りに内容を味読することに重点が置かれていました。原語で文章を読むのは時間がかかり予習は大変でしたが、中国語で書かれた文章をじっくり中国語で読む時間は本当に貴重なものなので、毎回しっかり予習して授業に臨みました。扱われた作品はどれも中国文学史上重要なもので、じっさいどれも読んで非常に面白く、先生の解説も熱心で、非常に勉強になりました。時間をかけて中国語で読み、内容を吟味したそれらの作品は、しっかり自分のなかに吸収していくことができたように感じます。とても充実していました。本学期はおもに1940 年代末から 1970 年代の作品を読みました。来学期はそれ以後の作品を授業で扱うようなので、ぜひ受講したいと思っています。

具体的には、以下の内容が講義されました。

・新中国成立後の文学状況
・赵树理「登记」「锻炼锻炼」と新中国成立後の農村社会
・陈翔鹤「陶渊明写挽歌」と 60 年代歴史小説の隆盛
・路翎「洼地上的“战役”」
・宗璞「红豆」
・台湾地区の小説（白先勇「游园惊梦」「永远的尹雪艳」、陈映真「将军族」）
・散文（傅雷「傅雷家书」、丰子恺「南颖访问记」、琦君「髻」、余光中「我的四个假想敌」）
・50～70 年代の詩歌（臧克家、何其芳、艾青、闻捷、蔡其矫、公刘、郑愁予、痖弦、林子、林庚、罗门、余光中、洛夫、食指、穆旦、牛汉の諸作品）

成績評価は、平常点 10 パーセント、白先勇「冬夜」を読みその内容や芸術的特色をまとめレポートする中間課題 20 パーセント、期末試験 70 パーセントでした。私の成績は 69 点でした。中国語で文学作品について論じるのは厳しかったです。しかし先生が強調していたようにいちばん重要なのはじっくり作品を読むことなのでその点私の目標は達成されました。

②「中国現代文学（上）」

開講学部：中国語言文学系、担当教員：高遠東、開講時限：火曜 15：10～17：00（2 単位）、人数：最大 80 名

この授業は、中国現代、特に新文化運動期から新中国成立前の中国文学史を解説するもので、今学期は 30 年代初頭の左翼文学の誕生や革命文学論争のあたりまで扱いました。具体的にどのような作家、思想、派閥が生まれ、どのような文学が生まれていったのか、当時の時代背景に即して解説がなされました。まずはじめに新文化運動と文学革命について講義がなされ、梁啓超、陳独秀、胡適、周作人といった当時の知識人の思想を中心に文学革命の諸相が講義されました。次に魯迅をテーマにとり、魯迅の諸作品の主題と芸術的特徴について具体的な作品をとりあげながら解説がなされました。その後は話が詩にうつり、胡適や郭沫若、徐志摩、聞一多と新月派の諸作品と思想を扱い、最後に 20 年代文学の二大潮流である文学研究会と創造社の諸人物・諸作品について解説がなされました。文学研究会について

は葉紹钧を中心に、冰心、廬隠、許地山、王統照等の代表的作家や、問題小説、郷土小説といったジャンルの作品についても解説がなされ、当時の文学界の潮流や問題意識について理解することができました。創造社については郁達夫を中心に解説がなされ、その後革命文学や左翼文学、革命文学論争、さらにいわゆる「革命の浪漫主義」について学び、30 年代の左翼文学連合の形成に向かうところで授業が終了しました。

いままで当該期の中国文学についてここまで詳細に学ぶことはなかったため、この授業は非常に勉強になりました。当該期の中国文学には日本も大いに関係しており、じっさい魯迅、周作人、郭沫若、郁達夫等は日本に留学し、そこでの経験が文学作品中に大いに反映されています。日本人としても非常に学ぶべきことが多い内容でした。授業内では具体的な作品を読むことはありませんでしたが、授業で言及された作品のうち参考書として指定されていた北京大学出版の中国現代文学作品選に載っているものに関しては、自分ですべて読みました。来学期はこの続きの文学史が解説されるはずなので、ぜひ受講したく思います。

成績評価は平常点、魯迅「伤逝」の内容と芸術的特徴をまとめてレポートする中間課題、期末試験の 3 本立てでした（内訳はわかりません)。私の成績は 77 点でした。

③「中国民俗与社会生活」

開講学部：中国語言文学系、担当教員：陳泳超、開講時限：水曜 18：40～20：30（2 単位)、人数：最大 60 名

この授業は民俗学の授業ですが、基本的には中国古代の諸文献を参照しつつ、現代中国のさまざまな民俗・社会的現象について解説していくものでした。授業名が「中国民俗与社会生活」となっているので、中国の少数民族の民俗・社会についても言及されるものと思って期待していたのですが、実際は漢字で書かれた過去の文献を参照しつつ漢民族の民俗・社会の諸側面について解説するものでした。

授業ははじめに民俗学とは何か、民俗学の発生といった総論から始まり、その後各論にうつりました。各論では、「陶冶と人牲」「歳時節日」「生肖」「姓名」「廟会」の 5 つのテーマを扱いました。「陶冶と人牲」では、中国古代文献中にたびたび登場する「陶冶」と「人牲」のテーマが民俗学的に何を意味しているのか、「歳時節日」では、節気と節日、および清明節の起源と風俗などについて扱いました。「生肖」は、いわゆる十干十二支のことですが、この起源と効能について解説がなされました。「姓名」も同じように姓と氏、名、字、号などの違いと起源、効能などについて解説がなされました。「廟会」では、中国の古代から存在する「廟会」を一つの民俗的現象ととらえてその特徴について学びました。

これらの風習、とくに節気、節日、生肖、姓名などは日本にもあるものであり、日本の風習がいかに中国の影響を受けているか改めて感じるとともに、ふだん耳にするけれどもきちんと学んだことのないそれらの来歴等について学ぶことができ、非常に有意義でした。来学期は民間文学について講義がなされるようなので、ぜひ受講したいと思います。

成績評価は、平常点 20 パーセント、民俗現象の聞き取り調査と分析報告 30 パーセント、

期末試験 50 パーセントでした。私の成績は 84 点でした。正直中間課題がつらくて適当に乗り切ったのですがなぜか点数が高めに出ていて嬉しいです。

④「中国古代文学（一)」
開講学部：中国語言文学系、担当教員：于迎春、開講時限：木曜 15：10～18：00（3 単位)、人数：最大 80 名

この授業は、中国古代文学の中でも最初期の先秦および秦・漢の文学作品を扱うものでした。具体的には、神話・口頭の原始文学、「詩経」、「尚書」、歴史散文「春秋」・「左伝」・「国語」・「戦国策」、諸子散文「論語」・「孟子」・「荘子」、屈原と「楚辞」、漢賦、司馬遷と「史記」、漢楽府と五言詩を扱いました。毎回当時の時代背景・文学状況の解説ののち、具体的に作品を読みながらその芸術的特徴を確認していく、という形で授業が進みました。文学史の授業ですが、原典を読むことを重視しており、授業内で上にあげた作品の有名な個所はすべて読解しました。私は古代漢語を勉強したことがないのと、（特に最初のうちは）中国語力が不十分なため、原典購読の箇所は聞き流し、おもに文学状況や芸術的特徴などまとめの部分を中心に勉強することとしました。試験は具体的な作品をしっかり読んで理解したうえでないと厳しいということを事前に先生に言われておりましたので、私はこの授業を履修登録せず、聴講しました。もし自分に古代漢語の心得があれば授業はもっと面白かったでしょうが、概説の部分を聞いているだけでもそれなりに文学史の勉強になりました。先秦・秦・漢の時代だけを、しかも 3 コマ連続で時間をかけて扱う授業だったので、じっくり古典と向き合うことができました。それでも授業時間はめいっぱいで、中国古典の奥深さには脱帽です。紀元前の文学史だけで授業が成立するあたり中国史の偉大さは本当に計り知れません。日本ではここまでじっくり文学史を学ぶ機会はないと思うので、非常に貴重な経験をすることができました。

成績評価は中間試験と期末試験で 50 パーセントずつでした（私は聴講のため受験しませんでした)。

また本学期は私は受講しませんでしたが「中国古代文学（三)」というタイトルで宋・元時代の文学史を扱う授業もありました。来学期はおそらく魏晋南北朝・隋・唐と明・清の文学を扱う授業が開講されると思うので、受けてみようと思います。

○元培学院での活動について

キャンパスアジアプログラムでの受け入れ先学部は元培学院です。元培学院はリベラルアーツ教育を行っており、開講している授業は少なく、今回のキャンパスアジアプログラムでは基本的に北京大学が開講しているほぼすべての授業を受けることができます。じっさい私が受講した授業はすべて中文系が開講しているもので、本来元培学院とは関係がありません。元培の現地の学生も、自分の興味分野に応じてさまざまな学部の授業を受講しているようです。

したがって、私は元培学院に所属はしているものの、基本的には学部との接点はなく、所属先が形式上元培となっているのみでした。しかしながら今学期は元培の行う留学生参加可能の活動が 2 度あり、私はそのどちらにも参加しました。

①中国近代名人と企業文化実践活動（2019 年 10 月 11～13 日）

この企画は上海において行われ、元培学院に所属している留学生 30 名ほどが参加しました（交換留学生の参加可能枠は 5 名のみで、他は全員 4 年間の本科生です）。金曜日の午後に高速鉄道で上海へ赴き、日曜日の午後にまた高速鉄道で北京に戻る、というタイトなスケジュールでしたが、非常に充実していました。初日は移動のみだったので、実際の活動は 2 日目と 3 日目の午前となります。

2 日目の午前中は、中国で誰もが知る食品会社の康师傅を訪問しました。はじめに会社の概要や社会活動等についての説明を受け、その後食品安全施設の見学を行いました。職員の方が企業の社会責任や理念について、熱く語ってくださいました。康师傅の主力商品はカップ麺で、いまや中国どこに行ってもお店で見かけることができます。中国の輸送網の整備や、忙しい現代社会における需要の高まりから、カップ麺産業は非常に盛況です。今回の企画も康师傅がスポンサーとなっており、金銭的な支援をしてくださっています。個人で外国で企業訪問をするのは簡単でないため、非常に得難い機会でした。

2 日目の午後は二手に分かれ、一方は上海ディズニーランド、もう一方は上海博物館に行きました。私は上海ディズニーランドに行きました。まさか学部の企画でディズニーランドに行かせてくれるとは思いませんでした。半日だけでしたが、上海ディズニーランドは小さいので、ほぼすべての主要アトラクションに乗ることができました。

3 日目の午前は中国共産党第 1 回大会旧址と蔡元培故居を訪れました。前者は中共に配慮して入れられたスケジュールかもしれませんが、じっさい行ってよかったです。展示スペースは小さいですが、改装された石庫門住宅の中にあり、建物は結構おしゃれです（私は個人的に上海租界や伝統住宅に興味があり、自分で多少勉強しているところです）。中国共産党の初期主要メンバーの経歴等がパネル展示してありましたが、多くの成員が日本留学経験者であることに驚きました。日本でこのあたりのことをもっとちゃんと教えてほしいです。蔡元培故居は元培学院の名にもなっている北京大学元総長の蔡元培の旧居であり、住宅地の奥にあります。たぶん観光客もまず来ないような場所なのでしょうが、元培学院の留学生として蔡元培故居を訪れて彼の事績等を知ることができてよかったです。蔡元培の当時の寝室や、彼が使っていた日用品等の展示物も見ることができました。

今回の企画は完全無料であり（上海ディズニーランド入園料を除く）、高速鉄道での移動やバスでの移動、食費等はすべて元培学院が出してくれました。心から感謝です。またこの企画のおかげで他国の留学生と仲良くなることができました。

上海ディズニーランド
超楽しかった

おなじみの外灘の夜景

共産党第一回全国代表大会旧址内部、
改装された石庫門住宅

蔡元培往時の寝室

②「成为元培人：书院实践教育活动」(2019 年 10 月 19～20 日)

これは本当に謎の企画で、本来元培学院の新 1 年生が参加するものなのですが、キャンパスアジアの交換留学生にもなぜか参加の呼びかけがあったため、参加しました。当日まで具体的な日程は知らされず、土曜日の朝にバスで北京郊外に連れ去られ、そこで「コミュニケーションと人生」「未知の自分を発見する」という謎の講義を受け、日曜日には「素質拡大活動」とかいう謎の活動に取り組まされました。これは完全に元培学院の新入生にむけて行われたもので、交換留学生が参加してもしょうがないものでしたが、元培学院が交換留学生に配慮して参加させてくれたものだと思います（無料でした)。わざわざ郊外まで行く必要があったのかよくわかりませんが、講座の内容はおもしろかったです (私にとっては内容そのものよりもやはり中国語の勉強になるので)。2 日目の活動ははっきり言って意味不明で、知恵の輪みたいなのを解かされたりしましたが、一部の人が参加するのみで完全にグダっており、最後は謎のお絵かきとなりました。多くの学生は退屈しており、特に交換留学生にとってはすでに年齢も彼らより上回っており入学当初の浮かれた気分も一切ないので参加せず、適当にふらふらしながら遊んでいました。2 日目に関しては何がしたかったのかまったくわかりません。

しかもこの土日は北京大学の国際文化祭と完全に日程が重複しており、多くの留学生がそこでブースを出していたのですが、私はこの企画のために参加はおろか文化祭を見て回

ることもできずやや残念な思いをしました。ここの日本ブースは毎年盛況なようで多くの日本人留学生が協力してやっているようでしたが、私はそこから切り離されるような形となってしまいました。そもそもこの日程では元培学院の全新 1 年生も同様に国際文化祭を見に行くことができなかったと思うのですが、そのあたりどうなっているのでしょうか。北京大は（ほかの中国の大学もそうなのでしょうが）文化祭やサークル活動がそこまで盛んではなく、一部の人のみがやっているという印象が強いので、国際文化祭などどうでもよいのでしょう。

○サークル活動および勉強に対するスタンスについて

学期が始まって 3 週間目くらいからサークルの勧誘が始まり、ブースが作られました。しかしその規模は極めて小さく、北京大学の規模を考えるとサークル活動はそこまで盛んではないようでした。サークルの数はそれなりにあるようですが、そのわりには東大のサークルオリエンテーション的なものは非常に小規模で、私も面倒になったためサークルには入りませんでした。いくつかサークルのウィーチャットグループには入りましたが、少なくとも私の加入したものはそこまで熱心に活動している感じでありませんでした。いっぽう格技系のサークルはかなりバラエティもあり、しっかり定期的に行われているようで、興味のある人には非常におもしろいと思います。

中国の大学生は（少なくとも北京大学レベルであれば）まずみな大学院に行くので（大卒では就職できません）、そのために大学の成績が非常に重要となります。ですからまじめに勉強するのが普通で、あまりサークル活動に打ちこむ人は多くないのでしょう。アルバイトをする人も多くありません。この点日本の大学生はのんきで全然授業に出ないうえに教員もやる気がないので、北京大学とは大違いです。私は北京大のように授業にばかり縛りつけられているのも嫌いですし、日本のように勉強をなめている社会も嫌いですが、どちらにもメリットデメリットがありなんとも難しいところです。北京大学の授業はとてもおもしろかったのですが、私は留学生で授業選択の自由がありコマ数も自由だったから楽しめたものの、当然本科生はもっとたくさん授業を受けているわけで、必修もあるので、大変だと思います。その点日本の方が自由だとは思いますが（特に文系）、学生も教員もやる気がなく、社会そのものが勉強を軽視しているため、中国の方が胸を張って堂々と勉強ができるので居心地が良いです。いっぽう北京大では授業が自分の生活に占める比重がどうしても大きく、親や同級生、社会からのプレッシャーも大きいので、やはり自由に自分のやりたいことを追求するのなら日本の方が楽かもしれません。たとえばまさに文化祭に出店するとか、お金を貯めて旅に出るとか、そういった自由さ、教室で学べない経験は日本にいた方ができるかもしれません。

○国慶節の使い方

国慶節で北京大学は 9 月 28 日から 10 月 6 日まで 9 連休でした。私はこの期間で河南省

の鄭州・洛陽・登封・開封に行きました。鄭州に 2 泊、洛陽に 3 泊、開封に 2 泊しました。要するに華北古代都市の旅です（西安にはすでに行ったことがあり、さらにその後週末を利用して安陽と邯鄲にも行きました。来学期には再度西安と、咸陽、天水、崋山、三門峡、商丘等にも行ってみようと思います）。2019 年は中華人民共和国成立 70 周年ということでいたるところで 70 周年記念行事のようなものが行われていました。

鄭州では市中心部からバスで 1 時間ほどかけて鄭州黄河風景名勝区に行き、人生で初めて黄河を目のあたりにし川の水に触れてみました。ほかに河南博物院・鄭州博物館・商都遺跡公園・二七記念塔などに行きました。洛陽では世界遺産の竜門石窟とシルクロード遺産の隋唐洛陽城定鼎門遺跡、さらに最初期の仏教寺院である白馬寺、関羽の墓である関林、また洛陽夜市と洛邑古城などを訪れました。洛陽は地方都市ですが夜市にはものすごい数の人がいました。登封へは洛陽からバスで行き、世界遺産の嵩山少林寺を見学しました。開封には特にこれといった観光スポットはありませんが、北宋の都として行政機関が置かれていた開封府や、開封城壁、テーマパークの清明上河園などを訪れました。10 月頭でしたがまだ残暑が厳しく、日中は半袖で過ごすほどでしたが、10 月 4－5 日ごろ、開封にいるときに雨が降り、それを境に気温が急降下し、秋に入りました。北京に戻ってからも、ちょうどその日から上着が必要になり始めました。私も数日体調を崩し寝こみました。

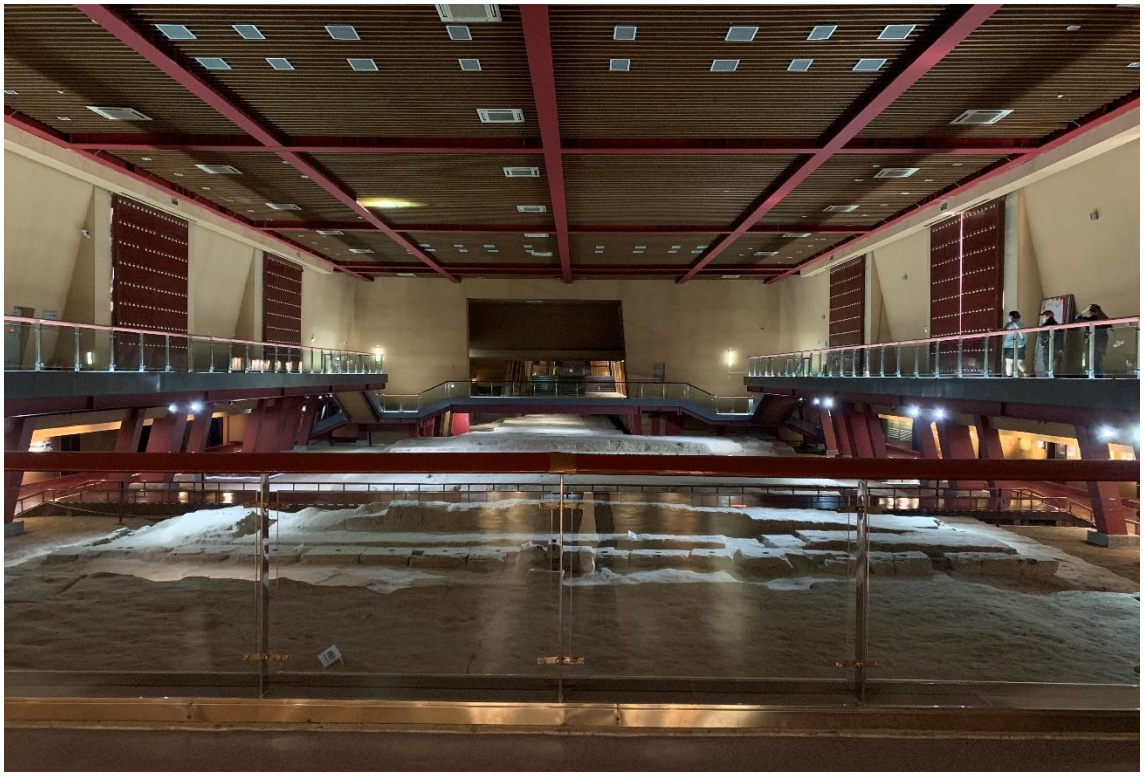
じっさいに勉強したことのある場所に行ってみる、これほど楽しいことはありません。私はとくべつ歴史に詳しいわけではありませんが、この 3 都市はいずれも超重要な古代都市であり、勝手にロマンを抱いておりました。中国はどの都市も歴史が圧倒的に深いので、本当に面白いです。そのような都市が現在どのような変貌を遂げているのか、文化財はどのように保護・観光地化されているのか、といったことを実地に学ぶことができます（私が上海租界や石庫門住宅に関心があるのもそうした理由からです）。

黄河、泥水である

竜門石窟、スケールの大きさに目をみはった

洛陽夜市、大にぎわい

夜の洛陽城麗景門、とても美しい



隋唐洛陽城定鼎門遺跡、歴史に思いをはせる

開封府、北宋の都

雨上がりの高速鉄道開封北駅

○来学期について

私は現在自宅でこの報告書を書いています。現在は冬休みで、中国にいるはずだったのですが、新型ウイルスの感染拡大に伴い、予定を切り上げて急遽帰国しました。来学期は遅れてスタートすることが確定しており、せっかくの留学なのですが、今は何もすることができません。ウイルスの発生源である武漢市は街ごと閉鎖され、中国全土ほとんどの都市で観光地は閉鎖、春節で予定されていたイベント等もことごとくキャンセルとなりました。上海や香港のディズニーランドが閉鎖されたこともニュースになっています。また香港の高速鉄道西九龍駅も閉鎖され、大陸との陸路での移動もストップされています。中国人の国内外の団体ツアーもすべて禁止され、基本的に必要のない外出は一切控えるように、ということになっています。北京の一部道路、省際バス等も止められています。いつ事態が好転し交通が復旧するのか、目途が立っていません。今はただ一日も早く事態が収束することを願うのみです。来学期も勉強や観光が楽しみでなりません。頭の中は中国語でいっぱいです。

2020 年 1 月 28 日記

（以上）